日本英文学会 中国四国支部
第72回大会
プログラム・梗概

会期：2019年10月26日（土）、27日（日）

会場：徳島大学　常三島キャンパス

〒770-8502　徳島県徳島市南常三島町1-1

日本英文学会中国四国支部 事務局

〒739-8521　広島県東広島市鏡山1-7-1

広島大学外国語教育研究センター　榎田一路研究室内

TEL 082-424-6446

第一日　10月26日（土）（参加受付 12:30－）

開会式・総会（12:45-13:15　1号館3階　301教室）

（司会）徳島大学教授　田久保　浩

開会の辞　日本英文学会中国四国支部支部長　吉中孝志

挨　拶　徳島大学総合科学部長　栗栖　聡

総　会

研究発表（13:30-16:40）

第1発表　13:30-14:10　　第2発表　14:15-14:55

第3発表　15:15-15:55　　第4発表　16:00-16:40

第1室（1号館3階　302教室）

（司会）広島大学准教授　西原貴之

1. EFL Learners' Strategy Use in Online Discussion

   広島修道大学大学院生　Stachus Peter Tu

2. 日本人の語学習得に関する質的アプローチ
   ―英語学習履歴のナラティブ分析と考察―

   岡山大学准教授　那須雅子

（司会）広島大学教授　小野　章

3. 「読む」から「創る」へ
   ―多読教材を用いたデジタル二次創作活動―

   広島大学准教授　榎田一路

4. 「意味の隙間の描き方」
   ―未来と現在の接近度、時制範疇の脱構築、曖昧性と越境性の文法学―

   静岡大学教授　久部和彦

第2室（1号館3階　303教室）

（司会）呉工業高等専門学校講師　蒲地祐子

1. 『から騒ぎ』と書物のメタファー

   関西学院大学大学院生　廣野允紀

2. *Romeo and Juliet* から *Hamlet* へ
   ―死のモチーフの変奏―

   岡山商科大学教授　松浦芙佐子

（司会）関西学院大学教授　竹山友子

3. プローテュース=マクベス
   ―主体の互換性と「材源」―

   島根県立大学教授　松浦雄二

4. 【招待発表】*The Fair Maid of the Exchange* における愛のドラマ

   武庫川女子大学教授　前原澄子

第３室（1号館3階　304教室）

（司会）安田女子大学准教授　田多良　俊　樹

1. リンガードとマーローの比較研究―使命の継承と変化―

就実大学教授　渡　辺　　浩

2. ヴァージニア・ウルフの『波』における「死の欲動」

広島大学大学院生　松　﨑　翔　斗

（司会）県立広島大学名誉教授　高　橋　　渡

3. *Pincher Martin*と煉獄―自分の死を認めたくないクリス―

安田女子大学大学院生　井　上　　彩

4. Emigration and America in the Short Stories of John McGahern

岡山大学講師　Ｂｒｉａｎ　Ｆｏｘ

第４室（1号館3階　305教室）

（司会）津山工業高等専門学校准教授　住　田　光　子

1. 民族と摩天楼の政治学―映画 *West Side Story*についての一考察―

高知大学准教授　宗　　洋

2. 弱々しいロチェスター
―映画『ジェイン・エア』（1996）に見るポスト・コロニアル批評の影響―

徳島文理大学教授　中　島　正　太

（司会）県立広島大学准教授　栗　原　武　士

3. 『緋文字』におけるパフォーマンス表象―ホーソーンの演劇的/観劇的想像力―

広島修道大学外国語契約教員　川　下　　剛

4. J. D. Salingerの作品における東洋表象とカウンター・カルチャー
―Jack Kerouacの *Lonesome Traveller* と比較して―

神戸大学大学院生　尾　田　知　子

特別講演（16:50–17:50　1号館3階　301教室）

（司会）広島大学教授　大　地　真　介

演題：　ハーレム・ルネサンスとネラ・ラーセン

講師：　愛知県立大学名誉教授　鵜　殿　えりか

懇親会（18:30–21:00）

（司会）徳島大学准教授　山　内　暁　彦

会場：　徳島大学生活協同組合食堂Kirara

会費：　事前Web申し込み5,000円（当日申し込みは6,000円）
※日本英文学会中国四国支部HPよりお申し込みください

第二日　10月27日（日）

研究発表（9:30–12:30）

第1発表　9:30–10:10　　第2発表　10:15–10:55
第3発表　11:05–11:45　　第4発表　11:50–12:30

第5室（1号館3階　302教室）

（司会）広島修道大学教授　福　元　広　二

1. *Mansfield Park*における発話描写
弓削商船高等専門学校講師　石　田　紗　瑛
2. ジェイン・オースティンの作品における “This is being serious.” 型構文について
広島経済大学非常勤講師　古　本　勝　則

（司会）広島修道大学教授　水　野　和　穂

3. A Study of Colour Metaphor in “The Garden Party”
広島大学大学院生　坂　本　聖　子
4. 【発表なし】

第6室（1号館3階　303教室）

（司会）神戸市外国語大学教授　西　川　健　誠

1. 懸垂するリンゴと屹立するマンドレイク
—ジョン・ダンの『魂の転生』における建築と植物—
広島大学大学院生　横　山　竜一郎
2. 原子論的宇宙論：アリストテレスとエピクロスの狭間で
—Thomas Harriotの数学論攷とJohn Donneの葬送歌を中心にして—
京都大学大学院聴講生　岡　村　眞紀子

（司会）インデペンデント・スカラー　樹真間　仁

3. ロバート・フィルマーにおける家族と政治
広島大学助教　古　田　拓　也
4. トマス・ブラウンの『キリスト教徒のモラル集』と*Ars Moriendi*の伝統
大東文化大学教授　宮　本　正　秀

閉会式（12:35–　1号館3階　301教室）

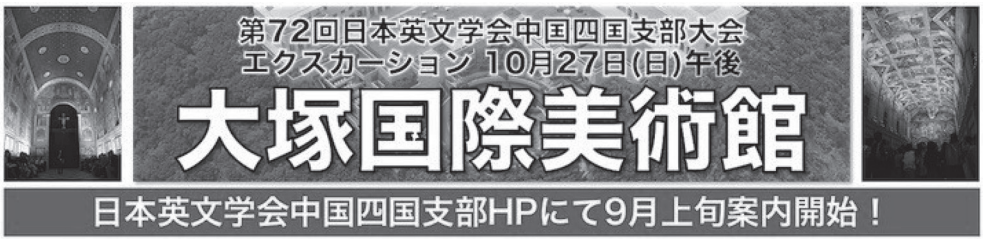
（司会）徳島大学教授　田久保　浩

閉会の辞　日本英文学会中国四国支部副支部長　髙　口　圭　轉

特別企画（エクスカーション）についてのご案内

日本英文学会中国四国支部第72回大会特別企画として、大会第二日の10月27日（日）午後に、大塚国際美術館（徳島県鳴門市）へのエクスカーションを行います。今話題の、陶板名画を中心とした美術館です。参加費は貸切バスおよび入場料がセットになった特別価格を予定しております。ふるってご参加ください。

詳細は9月上旬より中国四国支部ホームページでご案内いたします。懇親会と同様に、お申し込みは 9月10日から10月10日まで にお願いいたします。お申し込み多数の場合は先着順とさせていただきます。



Wikipediaの画像を改変使用（663highland CC-BY 2.5）https://ja.wikipedia.org/wiki/大塚国際美術館

第一日

―― 研　究　発　表 ――

EFL Learners' Strategy Use in Online Discussion

広島修道大学大学院生　Stachus Peter Tu

A large proportion of the communication among young people now takes place through social media platforms, yet there have been relatively few studies that have focused on the pragmatics of online communication. Foreign language education too, has also been slow to address online L2 language use, particularly from a pragmatic perspective. This is the focus of the two studies reported here. Both studies investigate the English produced by Japanese learners on an online discussion forum, specifically their employment of strategies for stance-supporting and mitigating face threatening acts. There are four main aspects of the studies: the use of two platforms, the use of closeness surveys to interpret participants' interactions, the types and frequency of stance-supporting strategies, and the use of nonverbal signals and other strategies to mitigate problems caused by possible disagreement. In the studies, Japanese university students exchange opinions on an online English discussion forum. Students prepare and post various discussion topics, such as "Smoking should be banned on campus.", on to an online class forum. Other class participants then respond to these statements and discuss the issues in English. Findings include gender-related preferences for hedges, the relative absence of nonverbal signals, and the implications of closeness between participants.

日本人の語学習得に関する質的アプローチ
―英語学習履歴のナラティブ分析と考察―

岡山大学准教授　那（な）須（す）雅（まさ）子（こ）

第91回日本英文学会全国大会シンポジウムの「文学を通じた「実践」教育」においては、英米文学者や異分野の専門家がそれぞれの教育現場で文学を活用する実践例が披露され、人間教育の手段として「文学的語り」が秘めている幅広い可能性が示された。一方、ナラティブ分析の手法は、文学研究に限らず、「医療」「心理」「教育」など様々な分野で独自に理論化され、実践されて大きく展開してきているところである。本研究においては、文学研究の成果としてのナラティブ分析を「非文学テキスト」の分析・考察に援用して、英語教育分野の研究に寄与することを目指す。文学研究が社会にその成果を還元し、貢献するための試みの一端を担いたいと考えている。

本研究は、日本人英語学習者が語る学習履歴に関するナラティブの口述記録に基づき、日本人にとって有効な外国語学習法を特定しようとするものである。発表者は、これまでに高度なレベルにまで外国語を習得することに成功した約40名に対してインタビューを行っており、本発表ではそれらのナラティブデータの分析から得られた成果を紹介し、さらに今後の英語教育に対する示唆について考察する。具体的には、インタビュー協力者が実践し英語学習を成功へと導いた学習法を特定し、それぞれの学習環境との関係や、その汎用性等について検討する。

「読む」から「創る」へ
―多読教材を用いたデジタル二次創作活動―

広島大学准教授　榎田一路（えのきだかずみち）

二次創作（fanfiction writing）は、既存の創作物の愛好者がその登場人物や世界観に基づいて新たな作品を創造する行為である。近年、外国語教育においても二次創作活動の可能性が指摘され（Black, 2005）、同活動を取り入れた教育実践やプロジェクトが多数報告されている（Behrenwald, 2012; Schattenherz, 2016; Sauro and Sundmark, 2016）。これらは「読む」「書く」を中心とした受容技能と発表技能の向上、ひいては目標言語の自律的な学習を促進するため、物語の持つ力を効果的に利用している。

発表者はこれまで、コンピューター支援言語学習（CALL）の立場からそのような物語の力に注目し、大学英語授業において多読活動とデジタル・ストーリーテリングを組み合わせた実践を行ってきた。そこでは作品の物語構造に基づく筋の語り直しや、特定の登場人物の視点による物語の再構成を英語で行い、その後スマートフォンでムービーを制作することが求められた。こうした実践に二次創作活動を導入することで、ICT支援による、より創造性の高い4技能統合型の授業が実現するものと期待される。

そこで本発表では、英語学習に意欲的な大学生を対象としたクラスで実施された、多読教材を用いたデジタル二次創作活動について説明する。実践後のアンケート結果をもとに、その有効性と課題を探る。

「意味の隙間の描き方」
―未来と現在の接近度、時制範疇の脱構築、曖昧性と越境性の文法学―

静岡大学教授　久部和彦（ひさべかずひこ）

「意味の隙間の描き方」という標語的な研究タイトルは、未来と現在という二分法では記述しきれない「移行性」の伸縮幅があり、その分数的な着地点があるという想定から発想されている。母語話者たちの常用的な英語文法としての現在進行形は、今現在、物理的・動作的進行性が「(顕在的に)見えていなくても」、「アレンジメント（認識や約束の共有と調整）」が(事前に)行われていれば、「心の中の意識として」進行性がスタートしているという理解になっている。では、このような現在進行形（be～ing）による内的コミットメントの進行性表出が、調整済みの近未来事態の表現形式としては当然視され、「非常にありそうな事態（to be very likely）」や「計画済の認識表現」が関わる「be going to」との適用に差異を見出す「背景知」とは何なのか。「調整（アレンジメント）」がなくても、現在進行形の優先使用はありうる。表現形式を決めるのは「未来と現在の合流点を切り分ける基準意識」の形成史による可能性があり、その場合、仕分の基準が心理的なものではなく、何らかの合理性や論理的な分用基準により選定されている可能性が高い。その先は、これまでに展開された「範疇分けの単純化」や凡庸な時制範疇の解体とその脱構築が起こることになる。「出来事の進行性を表現する場合の起点の記述とは、認識や調整終了以降の時点」という単純化された理解そのものについても再調査が必要になるかもしれない。

『から騒ぎ』と書物のメタファー

関西学院大学大学院生　廣野允紀（ひろのまさき）

シェイクスピアは書物の比喩を多用した劇作家である。たとえば、『マクベス』には “your face, my thane, is as a book where men / May read strange matters.”（I. v. 62–63）と、人の顔を書物に喩える台詞が見られるし、また『十二夜』には “[…] I have unclasp'd / To thee the book even of my secret soul.”（I. iv. 13–14）と、魂を書物に喩える台詞が見られる。さらに、『ヴェローナの二紳士』や『コリオレーナス』には友人を書物に喩える台詞も見られる。

E. R. クルツィウスによれば、顔や自然を書物に喩える手法は中世ラテン文学にさかのぼり、以来、ヨーロッパ文学全般に亙る広汎なトポスを形成してきた（『ヨーロッパ文学とラテン中世』）。本発表では『から騒ぎ』を中心に書物のトポスについて考察してみたい。『から騒ぎ』には、「使者」の “I see, lady, the gentleman is not in your *books*.” に対するビアトリスの返答 “No, and he were, I would burn my *study*.”（I. i. 79–80, italics mine）など、書物に関連する語が頻出する。しかし、そうした比喩に注目した研究は、意外に少ないように思われる。シェイクスピアは伝統的な書物のトポスをどのように変形し、自身の作品の中に取り入れたのか、またそれは作品全体にどのような意味生成の場を創り出し、どのような解釈を可能にしているのかといった問題を、同時代の他の劇作家とも比較検討しながら考察してみたい。

Romeo and Juliet から *Hamlet* へ
―死のモチーフの変奏―

岡山商科大学教授　松浦芙佐子（まつうらふさこ）

劇の素材とは、劇のプロットや登場人物の素材をさすこともあれば劇中の科白の素材をさすこともある。*Hamlet* のプロットは1200年頃ラテン語で書かれたSaxo Grammaticusによる *Historica Danica* 所収のAmlethの物語に基づく。これは、1570年にFrançois de Belleforestによってフランス語に翻訳されたが、Shakespeareとこれらの関係については多くの比較研究が行われている。また、Thomas Kydの *The Spanish Tragedy* やJohn Marstonの *Antonio's Revenge* との関連なども研究されている。一方、言葉や科白の素材としては多様な劇や詩、また公文書やパンフレットからの引用や借用がある。当然その中にはShakespeare自身の劇の科白や詩の一節も含まれる。

本発表では *Hamlet* の素材の一例として *Romeo and Juliet* に注目し、*Hamlet* における死のモチーフと *Romeo and Juliet* の関係を分析する。死と眠り、毒殺、自死、葬儀、喪など *Romeo and Juliet* に散見される死にまつわるテーマは思索的に *Hamlet* で深化されていく。分析に当たってShakespeareの *Romeo and Juliet* の主素材であるArthur Brookeの *The Tragicall Historye of Romeus and Juliet*（1562）やWilliam Painterの *The Palace of Pleasure*（1567）なども参考にし、Shakespeareの時代に共有される死についての意識を掘り下げ、*Hamlet* における死のモチーフの変奏について考察する。

プローテュース=マクベス
―主体の互換性と「材源」―

島根県立大学教授　松浦雄二（まつうら ゆうじ）

人生に対する幸福感も心の健全さも失って懊悩する状況を、深く気が病んだ状態すなわち「病気」と仮に言ってしまうならば、例えば喜劇の主人公プローテュースと悲劇の主人公マクベスは、ともに同じ「病気」に罹っている。片方は貞潔を象徴する名前を頂いた女性と、もう片方は予言する魔女との「出会い」のあと、突如「発症」する。両者とも妄念ともいうべき想いにまったく唐突に襲われ、囚われ、その後良心の葛藤の中で出口の見えない苦悩に投げ込まれて、慄き怖れながら何故このような状況になったのか自問自答しようとするが、その窒息しそうな、あまりの苦しさゆえに、問題は幾度か一時的に「棚上げ」されねばならない。だが、棚上げしても何の解決にもならない両者は、囚われた妄念の中に示された到達目標に向かって進む。

突然の発症、出口を見つけ難い苦悩と慄き、棚上げ――このパタンの独白を繰り返しながら行動していく二人の主人公の台詞には、人間の同様のメンタリティが描かれている。別の言い方をすれば、習作時代を卒業しようとする頃にも、いよいよ劇作家として円熟した頃にも、人間存在に向けられた関心の一つのベクトルは、変わらずに同じように劇作家の中にあったということでもある。本発表では、言わば内的なsourceであるそのようなベクトルが、外的な創作資料である種本にどのような影響を受け得るかについて考察することを通して、いわゆる「材源」について再考してみたい。

*The Fair Maid of the Exchange*における愛のドラマ

武庫川女子大学教授　前原澄子（まえはら すみこ）

Thomas Heywoodの創作と見なされる *The Fair Maid of the Exchange*（1607）では、ロンドンの取引所で針子として働くふたりの美しい娘、フィリスとモールをめぐって求愛のゲームが繰り広げられる。フィリスに恋する3人の兄弟と、モールに言い寄る男性は、それぞれ機知に富んだ言葉で愛を語ろうとするが、いずれも当時流行したオウィディウスの恋愛指南やシェイクスピアの *Venus and Adonis* などを求愛の手引書にしていることを窺わせる。一方、娘たちは言葉巧みに求愛を退ける一方で、自身の恋心を商売道具の針を用いて刺繍に託す。針子の愛のカウンセラーは、刺繍の図柄や銘の下書きを請け負う製図師（drawer）のクリプルである。クリプルは、刺繍の意匠をつかさどるだけでなく、針子の思いを自在に操るかのように、様々なトリックを用いて彼女らの思いとは異なる男性に両者を結びつける。本劇の筋書を決定するクリプルは、まさにステージ・マネージャーのような存在と言えるだろう。1590年代における詩の出版ラッシュを経て、詩は商品のように富裕な中産階級に流通するに至った。こうした文化背景に照らして、本劇における求愛のパロディとクリプルの役割について考察したい。

リンガードとマーローの比較研究
―使命の継承と変化―

就実大学教授　渡辺　浩

コンラッド（Joseph Conrad, 1857–1924）の初期の作品には主要人物としてリンガード（Lingard）が登場する。それは*Almayer's Folly*（1895）と*An Outcast of the Islands*（1896）においてであり、晩年の作品*The Rescue*（1920）にも再び彼が登場するが、この作品は*An Outcast of the Islands*を書き終えた後すぐに着手されたが、一度は未完のままにされ、晩年になってから完成されたことはよく知られている。同じく「マレーもの」の傑作とされる*Lord Jim*が1900年に出版されるが、この作品ではリンガードは登場せず、その後コンラッド作品に大きな影響を与えるマーロー（Marlow）が初めて登場する。リンガードもマーローも有能で好感のもてる人物として描かれるが、リンガードがコンラッド作品から姿を消すと同時にマーローが登場し、作中で大きな役割を果たす流れは、読者の興味を引く部分である。

主要人物としても、また主人公としても両者は活躍する。リンガードとマーローの役割、また深い意味で作家が込めた使命を比較検討してみた場合に、明らかにコンラッドが主要人物としてマーローを登場させる必要が生じたことが窺えるのである。この研究においては、リンガードとコンラッドの性格や行動の相違を分析し、コンラッドが作家活動の途上で、なぜリンガードを退場させてマーローを登場させたのか、その理由を具体的に考察する。

ヴァージニア・ウルフの『波』における「死の欲動」

広島大学大学院生　松﨑翔斗

ヴァージニア・ウルフ（1882–1941）は一作目の長編小説である『船出』（*The Voyage Out*）を1915年に出版した。その中で、主人公レイチェル・ヴィンレイス（Rachel Vinrace）が小説家志望のテレンス・ヒューエット（Terrence Hewet）に何の小説を書いているのかと尋ねた際、ヒューエットは沈黙についての小説を書きたいと答える。「沈黙」という主題は『波』（*The Waves*［1931］）において体現されている。『波』はバーナード（Bernard）、ネヴィル（Neville）、ルイス（Louis）、スーザン（Susan）、ジニー（Jinny）、ローダ（Rhoda）たち6人が成す一連の「劇的独白」（'dramatic soliloquies'）によって展開される。異質であるのは7人目の登場人物であるパーシヴァルである。なぜなら、パーシヴァルは6人にとって中心人物であるにもかかわらず、「劇的独白」をしない「沈黙」の存在であるからだ。

また、『波』における主題は「沈黙」だけではない。パーシヴァルのもとに6人が集約したかと思えばばらばらになるという点に着目すると、『ダロウェイ夫人』（*Mrs. Dalloway*［1925］）においてもウルフが扱った、「凝集と離散」もまた主題であろう。

「沈黙」や「凝集と離散」はジークムント・フロイトが『快感原則の彼岸』（1920）において提唱した「死の欲動」にみられる特徴でもある。そこで、本発表では「死の欲動」という概念を援用しながら、6人にとってパーシヴァルが表象するものを考察することで『波』の新たな読解の可能性を探りたい。ひいては、ウルフの死生観をも読み取りたい。

*Pincher Martin*と煉獄
―自分の死を認めたくないクリス―

安田女子大学大学院生　井上（いのうえ）　彩（あや）

William Golding（1911–1993）の三作目の小説である*Pincher Martin*（1956）は、敵の魚雷によって船から海に投げ出され、孤岩に命からがら泳ぎ着いた海軍士官クリスを主人公とするサバイバルストーリーである。この物語を難解なものとしている大きな理由としては、真っ赤な（とはつまり、茹でられて死んでいるはずの）ロブスターがクリスの眼前で動きまわるという幻覚や、クリスを描写する際に彼自身を「中心」（the centre）と「口」（the mouth）という単語に置き換えるナレーションなど、不可解な現象が散見されることが挙げられるだろう。さらに衝撃的なことに、読者は最終章にて、クリスは船が被弾して間もなく死んでいて、この作品の大半を占める彼の孤岩上でのサバイバルは現実では起こっていなかったという事実をつきつけられるのだ。それでは、クリスのいた世界とは一体何だったのだろうか。

本発表では、主に前期ラカンの精神分析に基づき、無人島に漂着してから狂人のようになっているクリスの精神状態を「神経症」と「精神病」の鑑別診断によって臨床的に分析する。そして、その結果を参照しながら本作品の理解しづらい出来事や描写を解釈していく。最終的には、クリスのいた世界が結局は何だったのかについて、ラカンの「想像界」「象徴界」「現実界」の概念に触れながら検討する。

Emigration and America in the Short Stories of John McGahern

岡山大学講師　Brian Fox

Nearly every major Irish writer of the twentieth and twenty-first centuries has in some way engaged (or has been obliged to engage) with America and its place within Irish culture, society, and politics. Whether through reflecting on emigration to America (Friel, Barry, Tóibín, McCann) or the migration to Ireland back across the Atlantic of American popular culture (Joyce, Bowen, O'Brien, Doyle), America has occupied a central place in Irish literary culture. As Yeats put it in 1904, 'no two nations are bound more closely together than Ireland and America'.

This paper will focus on how those bonds are reflected in the short stories of John McGahern. Provisionally, it will argue that allusions in those works to America and transatlantic emigration are more concerned with exploring questions of Irish self-perception than with America itself. In McGahern's late novel, *That They May Face The Rising Sun* (2002), one character notes: 'The way we perceive ourselves and how we are perceived are often very different'. In 'Doorways' and 'Bank Holiday' in particular, Irish-American female characters are introduced, it would seem, as much to provide the spark of a love-interest for those stories' drifting male protagonists as to provide a commentary on Ireland by way of comparison with America and American perceptions of Ireland.

Additionally, this paper will also take into account McGahern's methods of composition by reference to the John McGahern Papers, the archive of McGahern's draft manuscripts held at the James Hardiman Library, NUI Galway. This research will explore whether the published text differs substantially from earlier drafts (there are 23 in the case of 'Bank Holiday') and how that impacts on the reading of the stories being presented. (277)

民族と摩天楼の政治学
―映画 *West Side Story* についての一考察―

高知大学准教授　宗（そう）　洋（ひろし）

オーヴァーチュアに続き、どこか遠くから口笛が聞こえてくる。画面にはニューヨークの街並みの映像が映し出されている。空撮によるカットを積み重ねた後に、ズームとディゾルヴを組み合わせ、カメラはフィンガー・スナップする白人少年グループに焦点を合わせる。映画 *West Side Story*（1961）はこのように始まる。こうした映像は70ミリフィルムの特徴を生かした視覚効果として興味深いが、テクノロジーの文脈に加えて、合衆国の建国の歴史、ひいては西洋史の文脈から眺めてみることもできるのではないだろうか。

本発表では、冒頭のシークエンスを西洋史の文脈に置いてその意味を確認し、いくつかのシーンの映画文法的な分析、楽曲の分析を総合しながら *West Side Story* を民族と摩天楼という視点から考察する。

弱々しいロチェスター
―映画『ジェイン・エア』（1996）に見るポスト・コロニアル批評の影響―

徳島文理大学教授　中島（なかじま）正太（しょうた）

フランコ・ゼフィレッリ監督の映画『ジェイン・エア』（1996）において、ロチェスターはジェインにプロポーズする際、いったんしゃがみ込み、壁にもたれるような仕草をする。また、途中のセリフも弱々しく、どこか頼りない。最終的に彼は立ち上がってジェインに愛の告白をするが、これは最初から最後までずっとロチェスターが立ったまま求婚の言葉を告げる1943年版の映画とは対照的である。この相違がどこから生ずるのか、を考える手がかりとなるのが、1943年版から1996年版の間に登場するポスト・コロニアル批評であろう。同批評において、ロチェスターはジェインを支配下に置こうとする抑圧者であり、彼に幽閉された妻バーサはロチェスター、ひいては侵略を繰り返した彼の母国イギリスの「被害者」である、と解釈されることがある。またバーサを主役に据えたジーン・リースの『サルガッソーの広い海』（1966）は、作品という形でそのような読みを提示している、と言える。結果としてこのような批評が、原作自体の読み方だけでなく、原作の映画化にも影響を及ぼした、と考えられるのではないだろうか。本発表では、映画『ジェイン・エア』（1996）に見られるポスト・コロニアル批評の影響をロチェスターやバーサの描写をもとに検証しながら、その描写が以後の映像化作品（たとえば2011年版の映画化など）にどのような影響を及ぼしているかを考察する。

『緋文字』におけるパフォーマンス表象
―ホーソーンの演劇的/観劇的想像力―

広島修道大学外国語契約教員　川下（かわした）　剛（たけし）

Nathaniel Hawthorne（1804–64）は *The Scarlet Letter*（1850）を「罪と悲しみの劇」と呼び、登場人物を「役者」にたとえている。この物語に取り掛かる1年前の1848年5月に2つの劇評を寄稿しているように、この時期のHawthorneは演劇に関して自分なりのこだわりを持っていた。そして脱稿後の1850年5月の *American Notebooks* には、パントマイムの観劇へ出かけた感想が記されており、

当時の有声劇だけでなく無声劇、パフォーマンスへの興味が伺える。

*The Scarlet Letter*において、ヘスターとディムズデールは本当の自分を隠し、社会的な役割を演じる「役者」である。また、それぞれの緋文字を社会に晒し、その解釈を人々に委ねるパフォーマーとも言える。それゆえ伊藤淑子が指摘するように、*The Scarlet Letter*には舞台となる処刑台を中心とした演劇空間が表象されている。ただし、その空間には、舞台だけでなく観衆の状況や祝祭的空間、「役者」の舞台裏であるバックステージを含めることが重要となる。

本発表では、John Winthropの日記、Hawthorneの劇評、*American Notebooks*から、姦通罪や演劇に関する文化的歴史的コンテクストを参照しながら、新しいパフォーマンス研究の知見に依拠して登場人物のパフォーマンス性を読み解いてみたい。

J. D. Salingerの作品における東洋表象とカウンター・カルチャー
―Jack Kerouacの*Lonesome Traveller*と比較して―

神戸大学大学院生　尾田知子（おだともこ）

J. D. Salinger（1919–2010）の作品においては、東洋思想への言及の間隙を縫う形で、キリスト教などの西洋の思想・文化についても言及されている。アメリカ主流社会でエスニシティの点で「周縁」に追いやられてきたユダヤ系作家Salingerは、「西洋＝中心／東洋＝周縁」という二項対立的構造を超越するため、ユダヤ系の「周縁性」を東洋に投影させて表象している。

このように、Salingerの文学には、覇権的価値観に対する反発が描かれ、社会批判的要素が顕著である。東洋思想を西洋的価値観と同列に並べることで、西洋／東洋という階層序列的二項対立を攪乱し、既存の社会的価値観の再考を促しており、主流社会・文化に抵抗するカウンター・カルチャーの要素を垣間見ることができる。しかしながら、Salingerの作品における思想・文化の複数性とカウンター・カルチャーの関連性は、これまで十分に分析されてこなかった。

本発表では、Beat Generationの中心人物として名高いフランス系カナダ人作家Jack Kerouac（1922–1969）の短編集*Lonesome Traveller*（1960）を再読し、Salingerの作品における宗教・文化の複数性とカウンター・カルチャー的表象との関連性を指摘する。東洋思想の使用とその理想化という観点から、SalingerとKerouacの作品を比較検討し、共通点を焙り出すことで、Salingerの東洋表象をカウンター・カルチャー的表象として位置づけたい。

第二日

―― 研　究　発　表 ――

*Mansfield Park*における発話描写

弓削商船高等専門学校講師　石田紗瑛（いしだ さえ）

ジェイン・オースティンの『マンスフィールド・パーク』（*Mansfield Park* 1814）は、語り手が主人公のファニー・プライスだけでなく、様々な作中人物の視点からその心理を描き出すという点で他の長編5作品とは異なっている。

主人公ファニーは、バートラム家にやって来た当初、自信のない、ひどく内気な少女として描かれる。物語が進むにつれて、彼女は存在感を増し、正義感と道徳心を備えた大人の女性へと成長する。その成長を描く上で重要な役割を果たしているのが、彼女の発話や思考を描写する話法の形式である。ファニーが成長する過程で、その発話や思考を描写する話法の形式が変化し、読者に彼女が成長する様子をより強く印象付けているように感じられる。

ファニーの存在感が増すにつれてその発話が描かれる機会が増え、逆にその存在が軽視されるような場面では、彼女の発話描写は思考描写に取って代わられる。オースティンの作品におけるヒロインの特徴として、Morini（2009）は、彼女たちが存在感を増すにつれて発話する機会が増えることを指摘しているが、その話法の形式については十分に分析されていない。

本発表では、『マンスフィールド・パーク』に見られる多様な話法の形式が、ファニーの成長を描く上でどのように用いられているか考察する。さらに、発話描写の形式だけでなく、その中に見られるモダリティ表現などにも着目したい。

ジェイン・オースティンの作品における “This is being serious.” 型構文について

広島経済大学非常勤講師　古本勝則（ふるもと かつのり）

本発表では、ジェイン・オースティンの “This is being serious.” 型構文の使用法に関して考察する。オースティンの全作品の中にこの構文は、“This is being serious.” 型が3例、“It is being clever.” 型が2例、“It was being deficient.” 型が1例、合計6例存在する。この構文に関してはすでに松谷（1999）「“This is being serious” 型構文再考」によって *being* を形式的に動名詞と考えるのは妥当としながらも、当事者が関与する場面の一時的な状況や事態のみを指示する *It* や *This* を主語に用いて「一時的な振る舞い」を強調する手段だと考えることも可能であると論じられているが、本発表では、以下の観点から再考察する。まず、この構文と同型の “This is doing.” 型との連関を、主語が *This* / *That* / *It* であるものを例に挙げ比較検討しながら考察する。次に、“This is being serious.” 型構文においても、主語である *This* と *It* が指す先行語句を拠り所に、*doing* が持つ特質が「ある行為への従事」であることを念頭に、大別して動名詞は「一般性」、現在分詞は「一時性」を表すことを基準として「動名詞」と「進行形」の峻別をおこない、“This is being serious.” 型構文における *being* に対する新たな解釈につなげていく。三点目は、“This is being serious.” 型構文の6例は、全て会話文中のみで用いられているが、その意図を考察する。以上の三点から、オースティンが “This is being serious.” 型構文を選択したことが、どのような表現効果を読み手に与えているかを考えたい。

A Study of Colour Metaphor in “The Garden Party”

広島大学大学院生　坂本聖子（さかもとせいこ）

本発表では、Katherine Mansfield（1888–1923）の “The Garden Party”（1922）における色彩語及び色彩表現に着目することによって、視覚的観点から登場人物の心理描写を考察する。

Langacker（2008）は、“visual metaphor” を提唱し、Lakoff and Johnson（1980）は “visual field” という表現を使い、視覚経験の概念化を指摘している。さらに、Bennett（1988）は “color metaphor”という用語を使い、色彩語と色彩表現を扱ったメタファーを文学的観点から議論している。視覚経験の概念化と色彩語隠喩に関する先行研究を踏まえ、登場人物の心理描写を可視化しながら本作を掘り下げてみたい。

本作では、冒頭の場面から主人公の視点を通した風景描写が絵画のように描出され、色彩は主人公の心的状態を比喩的に表現している。この作品を3つの場面に分けてみていく。まず、シェルダン家の朝の場面では、空の描写から “blue” を取り上げ、その色彩がいかに主人公の抽象的で捉えにくい心的状況を織り込み比喩的に表現されているかを検討する。次に、家の場面においては “green” に焦点をあて、主人公の思考の転換の過程と照らし合わせながら、その色彩がLangacker（2008）の提唱する “reference point” として作用しているかどうかを検証する。最後の場面においては、Lakoff and Johnson（1980）の指摘する “orientational metaphor” を援用し、方向性を示す語とともに使用される濃淡、陰影を描写する表現（*dark*, *dusky*, *shadow*, *deep*, *shade*等）を分析する。

懸垂するリンゴと屹立するマンドレイク
―ジョン・ダンの『魂の転生』における建築と植物―

広島大学大学院生　横山竜一郎（よこやまりゅういちろう）

ジョン・ダン（John Donne, 1572–1631）による長詩『魂の転生』（*Metempsychosis*, 1601）には、建築のイメージが頻繁に出現する。その冒頭に付された散文の「書簡」（“Epistle”）では、書物と建築物とが類比され、続く本編の詩では、ある一つの魂が植物、動物、人間の肉体へと移動するというピタゴラスによる教理に基づいた物語が展開されるが、そこでは肉体が魂にとっての仮宿として、すなわち、建築の比喩によって描かれている。このようなイメージを時代的な文脈から検討すれば、ダンが生きた初期近代イギリスが建築学の興隆を経験したという史実は興味深い。というのも、彼を代表とする形而上詩人たちの特徴のひとつが、詩作の過程においてさまざまな学識を積極的に援用したことにあるからである。本発表では、物語の主人公「魂」が最初期に宿る二種類の植物、リンゴとマンドレイクの表現に特に注目して、それらを同時代の建築理論書や文学テクストなどの資料と比較して分析することで、詩人の想像力による世界が構築される際に当時の建築学的知識が果たした役割の一端を考察する。

原子論的宇宙論：アリストテレスとエピクロスの狭間で
―Thomas Harriotの数学論攷とJohn Donneの葬送歌を中心にして―

京都大学大学院聴講生　岡村眞紀子（おかむら まきこ）

1610年前後は宇宙論に関して激動の時であった。Nicolaus Copernicusに続いて、Johannes KeplerとGalileo Galileiが、知を揺るがす書を相次いで出版したからである。

1609年、Galileoに先立ち、自作の望遠鏡で月や木星、太陽黒点を観測した数学者Thomas Harriotは、その執筆稿を殆ど出版に付さず、膨大な手稿を残した。British Library所蔵の数学論攷とWest Sussex Public Office所蔵の天体観測記録、同時代天文学者についての論を併せ読み、彼の宇宙論を読み解くことを試みる。前者からは無限宇宙の枠組みと、原子からの宇宙構成論を、後者からは、同時代のKepler、Brahe、Galileoの宇宙論に対する評価、見解を読み取る。

Harriotと同時代を生きた詩人John Donneは、1611年出版の*The first Anniversary, An Anatomie of the World*で、'new Philosophy calls all in doubt' と新哲学による知の世界の動揺を示し、新たな知見での宇宙を、「世界の解剖」の一端として描く。同じ頃に書かれた*The second Anniversary: Of the Progresse of the Soule*や、*Verse Letters*、*Epicedes and Obsequies*では、Donneの宇宙の枠組みと宇宙構成に関する関心や知見が読み取れるが、その儘に、彼が単に科学的な知見を開陳したとは言えない。科学･哲学の世界にも宗教の世界にも論争を招き、多くの科学者、哲学者を困難に巻き込んだ、新哲学すなわち新天文学への関心と理解とを、叙任直前のDonneがいかにその詩に描き、それによって何を表現したかを、infinite universeとatomism、特に後者に焦点を当て、知の歴史のコンテクストにおいて明らかにするのが本論の目的である。

ロバート・フィルマーにおける家族と政治

広島大学助教　古田拓也（ふるた たくや）

ロバート・フィルマー（Robert Filmer, 1588–1653）という名前は、様々な形で、様々な場所で利用されてきた。十七世紀の後半にジョン・ロック（John Locke, 1632–1704）は自らの議論の踏み台としてフィルマーを使い、第二次世界大戦後の日本では戦前のイメージの象徴として彼の名前が用いられた。そうなった理由の一つはおそらく彼の家父長主義にあったと言ってよいだろう。事実フィルマーは家父長主義者であったし、また彼の議論は確かに当時の家父長主義的な家族観を背景にしていた。さもなくば、彼の政治理論は同時代においてすら意味をなさなかったであろう。

だが同時に、家父長主義とは、受け手が様々なイメージを読み込みやすい概念でもある。本報告の目的は、この伸縮性に富んだ概念をフィルマーに適用する限界を探ってみることにある。すなわち、家父長主義という言葉から何をイメージするとフィルマーの政治思想の説明として適切なものとなり、どこまでいくとそうでなくなるのかの線引きをおこなってみたい、ということである。そのために取り上げるのは、フィルマーにおける女性と家長の地位の長子相続という二つの要素である。本発表では、これら二つの要素に注目しつつ、女性はあくまで助け手であり、統治者にはなれないという議論はフィルマーとは無関係であること、そしてまた、祖国の家長の地位は不変の長子相続によって受け継がれてきたし、これからもそうあらねばならぬという議論もまたフィルマーとは無関係であることを示したい。

トマス・ブラウンの『キリスト教徒のモラル集』と*Ars Moriendi*の伝統

大東文化大学教授　宮本正秀（みやもとまさひで）

ブラウンが医師として活動した17世紀においては、患者の最期を見届けることは、聖職者の仕事とされており、患者の死期が近いことが明らかである場合、医師はその場所を離れるのが普通であった。医師（physician）は、人間の肉体的な（physical）部分を担当し、魂や霊的な部分には関与しないという住みわけが成立していたのである。一方、死にゆく人の魂を見送るための一連の作業は、聖職者や近親者の仕事であった。臨終において、人の魂は悪魔からのさまざまな誘惑にさらされると考えられており、死の瞬間こそが、魂の行く先を決めるうえで最も重要であると考えられていた。

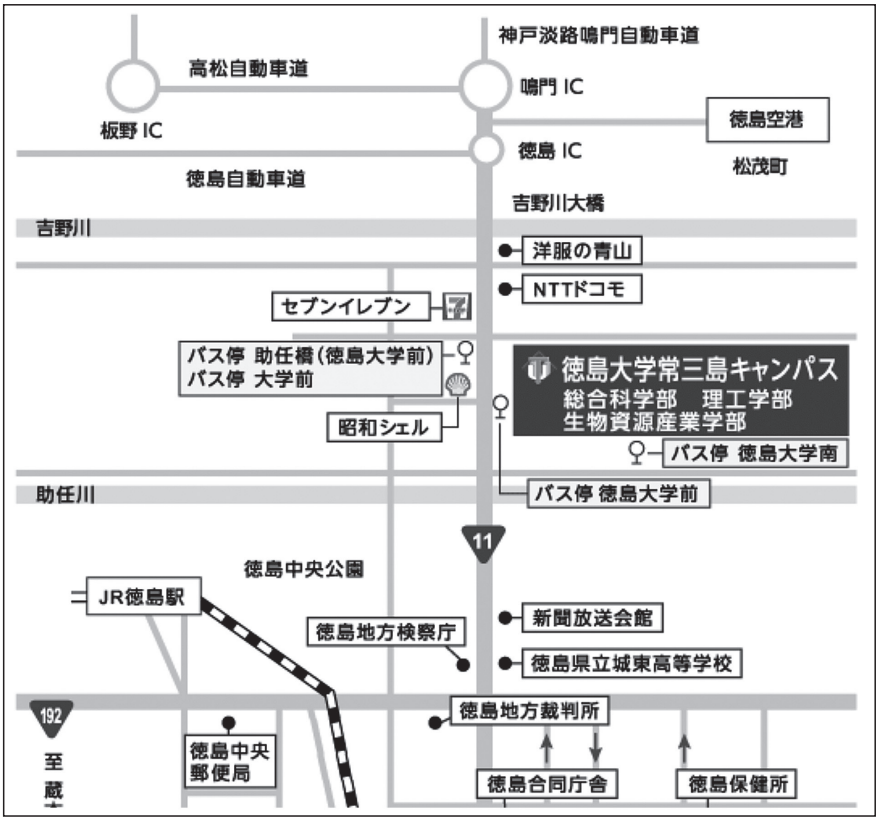
Ars Moriendi（『死ぬための技法』）は、15世紀に成立したテクスト群で、17世紀にかけて同様の内容の大小さまざまな書物がヨーロッパ各地で流通した。そこには、死にゆく人の魂を、天国へと送り出すために必要な方法が記されていた。*Ars Moriendi*は、各国語に翻訳翻案されるとともに、木版画のみの小冊子版も広く流通し、死にゆく魂の行く末が、すべての階層の人々にとって重要な問題であったことを示している。

ブラウンは、後年の著作『ある友人への手紙』（*A Letter to a Friend*）において、ある若い患者の最期を見届け、その死一部始終を記録している。彼は、その後半部分に加筆し『キリスト教徒のモラル集』（*Christian Morals*）という教訓集を著した。本発表では、『キリスト教徒のモラル集』を*Ars Moriendi*テクスト群の一部分と位置づけ、ブラウンが人間の生と死にどのように向き合ったかを考察する。

―交通案内―

大学所在地

〒770-8502　徳島県徳島市南常三島町1-1
TEL：08-656-7000（代表）



大学への主な交通機関

JR徳島駅からのアクセス

■ 徒歩の場合　約20分（経路はGoogle Map等でご確認ください）

■ バス利用の場合　約20分

徳島市営バス

徳島駅前から「中央循環（左回り）」行・「島田石橋」行・「商業高校」行 他に乗車し、「助任橋（徳島大学前）」又は「徳島大学南」下車徒歩約5分

（注意）「商業高校」行のみバス停が「徳島大学南」になります。

徳島バス

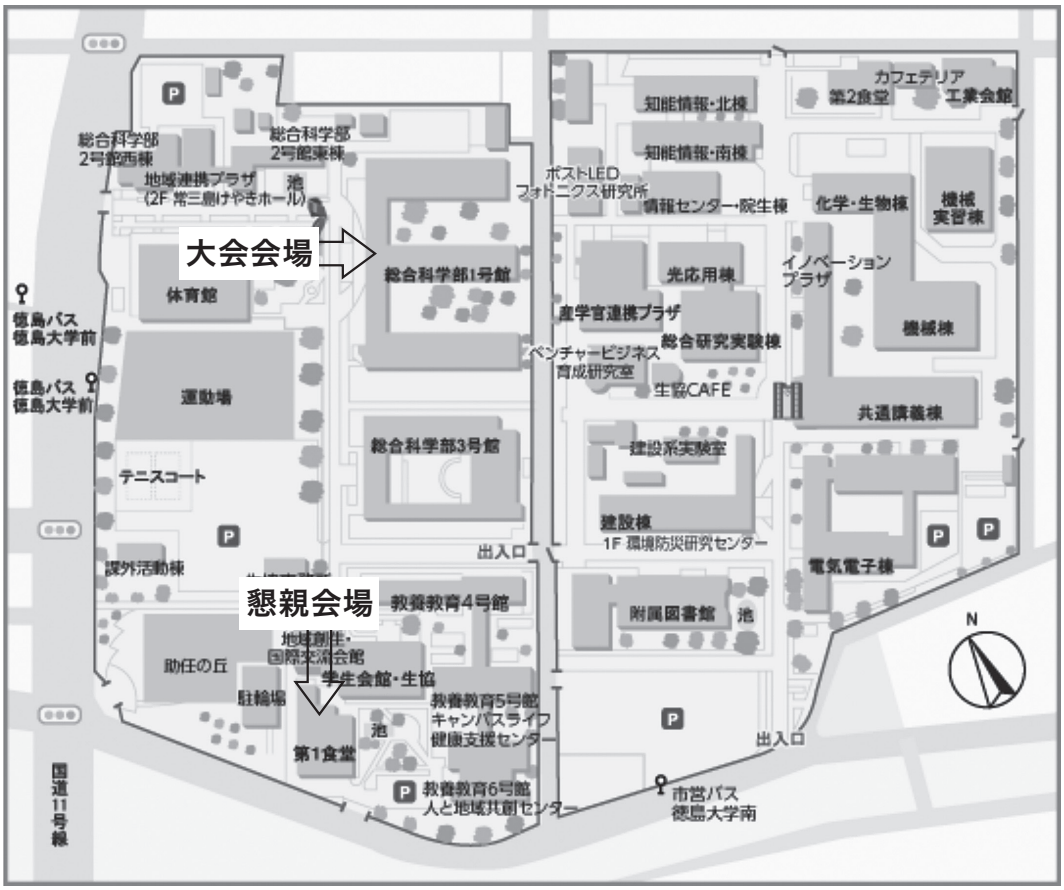
徳島駅前から鳴門線、鍛冶屋原線に乗車し、「大学前」で下車徒歩約5分

徳島空港からのアクセス

■ バスで 約30分

徳島阿波おどり空港から「徳島駅前」行に乗車し、「徳島大学前」下車

―建物配置図―

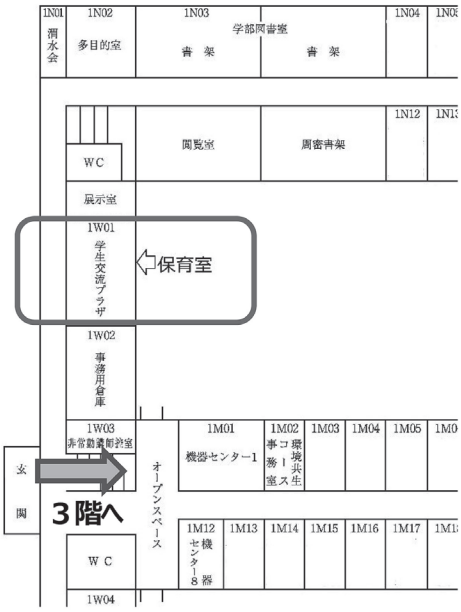


大 会 会 場　総合科学部1号館
懇親会会場　生協食堂Kirara 1F

土曜日の生協食堂営業時間は11時～14時。日曜日は休業。国道の向かい側にスーパー、コンビニエンスストア等があります。

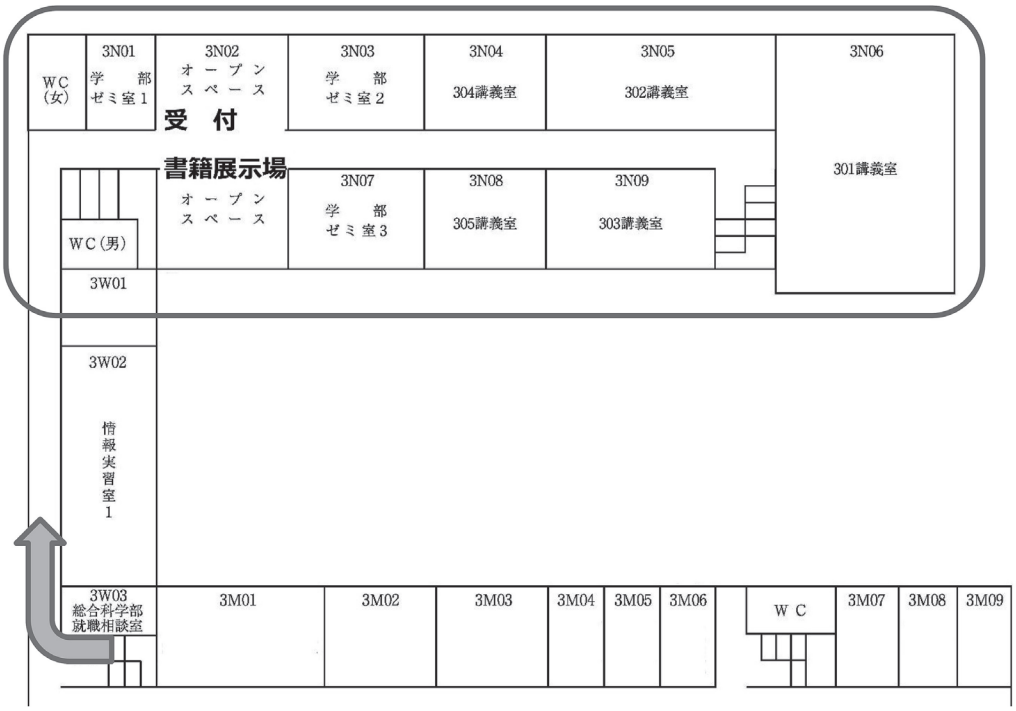
—会場案内(総合科学部1号館)—

〔1階〕



〔2階〕

〔3階〕



―会場のご案内―

理事会会場	1号館 2階	第2会議室	研究発表会場		
受　　付	1号館 3階	オープンスペース	第1室	1号館 3階	302教室
書籍展示場	1号館 3階	オープンスペース	第2室	1号館 3階	303教室
開会式・総会 閉会式	1号館 3階	301教室	第3室	1号館 3階	304教室
特別講演	1号館 3階	301教室	第4室	1号館 3階	305教室
司会者・ 発表者控室	1号館 3階	ゼミ室2	第5室	1号館 3階	302教室
一般会員控室	1号館 3階	ゼミ室3 オープンスペース	第6室	1号館 3階	303教室
役員・事務局 控室	1号館 2階	第2会議室	保育室	1号館 1階	学生交流プラザ

―懇親会のご案内―

開始時刻：　午後6時30分
会　　費：　5,000円（事前Web申し込み）／6,000円（当日申し込み）
会　　場：　徳島大学生活協同組合食堂Kirara

懇親会の事前申し込みは中国四国支部HP上で受け付けます。